

Interview インタビュー | 八木禎治 Photo: Gianni Neiveller

# Sadaharu Yagi

## アメリカでは国籍は関係なくできるかできないかだけだから純粋に音楽に向き合えるんです

今年1月に開催された第56回グラミー賞において、最優秀ラテン・ポップ・アルバム賞を受賞したドラコ・ロサ(写真右)の『VIDA』。本作に共同レコーディング・エンジニアとして携わった日本人がいることをご存知だろうか？ Sadaharu Yagiこと八木禎治(写真左)がその人だ。福岡県北九州市出身の八木は、現在ロサンゼルスを拠点に、アメリカ国内だけでなくイギリス、ドイツ、スペイン、ブルガリア、日本、ブラジルなど世界のプロジェクトに参加。これまでにシャキーラ、リッキー・マーティンといったラテン音楽からリンパ・ビスキットといったロックまで手掛けている。八木がどのようにして現在の地位にたどり着きグラミー賞を受賞するに至ったのか、帰国中の八木に話を聞いた。

### 何もツテはなかったけれど 単身アメリカへ渡りエンジニアに

#### ○ エンジニアを目指したのはなぜでしょうか？

●もともと音楽は好きで、バンドでドラムをたっていたんですけど、バンドでは食べていけないなと思って……ただ音楽にかかわる仕事をしたいなといろいろと模索をしていた中で、広く音楽を見る立場のエンジニアやプロデューサーに興味があったんです。

#### ○ 高校卒業後、九州芸術工科大学(現九州大学)に進学しますが、大学ではどのような勉強を？

●物理的な観点での音の勉強や、デジタルとアナログの議論といった、実際の現場ではなかなか扱わない内容でしたね。そういった知識は、それをどう理解して使うかということが大事なんですけど、実際大学ではあまり実践的なことはできなかったのも、もっとテクニカルなことも学びたいなとも思っていました。

#### ○ 大学卒業後の2005年にアメリカへ行ったの

#### はそういう理由から？

●そうですね。音楽の出来上がる現場で仕事をしたいと思っていて、しかも洋楽が好きで、特にポップ・クリアマウンテンやエディ・クレイマーなど、時代を越えても一発で彼の音だと分かるエンジニアにあこがれがありました。よくCDのクレジットを見て、同じエンジニアの作品を聴きあさったりしてましたし。それでアメリカに行ってみようと思ったんです。

#### ○ 何かツテがあったとか？

●いえ、何もなかったですね。本当に一人で渡って、まずビザが出ないので、UCLA Extensionで1年くらい勉強したんです。そこでアメリカの音楽の考え方や、日本で知っている音楽用語が実際はどういうふうに使われているのかを知ることができました。いきなり現場に入るのではなく、焦らずにじっくり勉強できたのは良かったですね。

#### ○ その後どのように？

●インターンシップで働き始めたんですよ。MOJ AVE AUDIOの社長であるダスティ・ウェイマンのスタジオ、マッドドック・スタジオで。インターンの出願で80通くらいメールを出して、返ってきたのが2通でしたね。

#### ○ 仕事内容はどのようなものだったのですか？

●基本的には機材は触らせてもらえなくて、インターンという名のランナーという仕事で……「昼飯を買ってこい」「プリンターのインクを換えておけ」という、いわゆる使いつ走りですね(笑)。だから大体2カ月くらいで辞めてしまう人がほとんどなんです。それでも僕は何とか続けて、ダスティに可愛いがってもらえるようになったんです。ダスティは新しいマイクのテストなど、たまにしかスタジオに来なかったんですけど、そういう機会に段々近くなってきて。それで、ダスティが“こいつはいける”と言ってくれて、コネが広がっていったって徐々に仕事に来るようになりまし

た。もちろんそのチャンスで失敗してしまったらそれで終わりですけどね。でも、そこでもうまくいけば次へへとつながっていくんです。

#### ○ 当時のロスのスタジオの機材はどのような環境でしたか？

●デジタル全盛でしたので、基本はAVID Pro Toolsが主流でしたが、アナログ・テープももちろんありました。今でもバジェットがあれば、アナログ・テープでのレコーディングは普通に行われていますね。あとLAでは骨のあるギターやドラムなど音の太いものを録る場合、コンソール/マイクプリはビンテージNENEがないとダメだと言われています。それがスタジオの顔として存在し、ちゃんとしたロック音楽を録ろうとするなら、NEVEの80シリーズは外せないです。もちろんSSLもあって、ミックスで使うことが多いです。Pro Toolsのみでミックスしてしまうセッションも増えてきていますね。基本的にLAではPro Toolsが使えないと相手にしてもらえないですね。

#### ○ 現地では、Pro Toolsを使うことに抵抗はないのでしょうか？

●それは全くないですね。どう使うかということにこだわりがあるというか。コピペ前提に考えていたり、録る前から“修正しますよ”なんてことを言うとか、真剣に音楽をやる気があるのか、と。例えば僕がよくレコーディングで一緒になるドラマーのサイモン・フィリップスも、僕からしたら一緒に仕事ができるだけであらいたいんですけど、「本当に申し訳ないけど、あと5分あるよね。サビの2小節前からもう1回チャレンジさせてもらっていいかな」と言ってくるんですよ。トップ・ミュージシャンだから、そんな申し訳なさそうに頼まなくてもいいのに、エンジニアに最高のパフォーマンスを録らせるということがプライドなんじゃないかな。もちろんアナログの時代はそれができなかったというのはありますが、デジタルになったからと

って、手を抜いていいわけではないですよ。そういう議論はしょっちゅうあります、そんなことをやっているから良い音楽が生まれないんだと。

## プロのエンジニアなら どんな機材を使っても良い音楽を作る

○今年ドラコ・ロサのアルバム『VIDA』でグラミー賞を受賞しました。彼とはどのようなきっかけで仕事をするようになったのですか？

●紹介でしたね。今回共同でグラミー賞を獲ったエンジニアと、過去に仕事をすることがあって。ドラコがハリウッドにスタジオを持っていて、そこで映画やドラマの音楽などをパートナーとして一緒にやってくれと言われたんです。ドラコはアメリカではすごく有名なアーティストだったので、ぜひやってみよう。その過程で、今回のソロ『VIDA』も作ることになり、一緒にやりました。

○ラテンの音楽が得意だったのですか？

●実はそこまで経験はなかったんです。だから、今回のプロジェクトでラテン音楽の勉強がすごくできましたね。

○そういった新しい現場ではどんなスキルが要求されるのでしょうか？

●新しい現場に限らずですけど、まず音楽を知っていないと話になりませんね。突然“あの曲のあのフレーズ分かる？”とか、“あの音みたいにできる？”と言われたりしますから。知らないと言ってもいいですけど、すぐに調べて追いつかないとやっていけないです。僕も、“明日フアネスが来るから準備しておいて”と言われたことがあって、最初“フアネスって誰だろう？”と思ったけど、“あーフアネスが来るんだ”ととりあえず答えて(笑)、それでも次の日まではしっかり調べてお

くということがありました。

○ドラコのスタジオ機材を教えてください

●Phantom Vox Studiosと言って、卓は32chのビンテージNEVE 8068。もちろんPro Toolsもあって、ほかにSTUDER A827やUNIVERSAL AUDIO 1176LN、TELETRONIX LA-2Aなどのアウトボード類、マイクもNEUMANN U 67、U87、TELEFUNKEN U47、ROYER LABS R-122、R-121、MOJOAVE AUDIO MA-100など多くそろっていましたね。

○そういった機材の中で、自分の中で外せないものはあるのですか？

●なかなか難しい質問ですね。プロのエンジニアならどんな機材を使っても良い音楽を作るものだろう、と思うので、その機材がないと良い音楽を作れないわけではないですけど(笑)、僕の聴いてきた音楽とロックが好きだということもあって、ビンテージNEVEのマイクプリ。マイクプリで音楽が決まるわけではないですけど、NEVEは自分の音が作りやすいですね。

○マイクはいかがですか？

●リボン・マイクですね。立ち上がりがスムーズで、ギターは絶対ROYERを使っています。コンデンサー・マイクには出ない感触で、素直な音で、聴いたときに自分がアンプの前で聴いていた音がするんです。ほかにCOLESやRCAなども使いますが、RCAはよほど味付けしたいときですね。

○そんなドラコ・ロサとの作品でグラミー賞を受賞しましたがいかがですか？

●グラミー賞を獲って周りはすごく喜んでくれていて、僕自身うれしいんですけど、1つの自分の証しになったかな、というくらいです。今でも仕事軌道に乗っているかと言えば、そう意識することはないですし、大学を卒業して以来、少しずつ

## Release



『VIDA』  
ドラコ・ロサ  
輸入盤

①ドラコ・ロサ (vo. b. g. k. p)、マーク・アンソニー (vo)、ルーベン・ブラデス (vo)、ラスティ・アンダーソン (g)、セルジオ・ヴァリン (g)、アレックス・アル (b)、ジェビン・ブルーニ (k, prog)、パトリック・ウォーレン (k, prog)、スタティック (k, prog)、ルイス・コンテ (perc)、他  
②ドラコ・ロサ、ジョージ・ノリーガ  
③八木祐治、デイヴ・クラウス、ファビアン・セラーノ、フェルナンド・キンタナ、アラン・レスカホーン、ネルソン・ガズ・ジェイム、セス・アトキンス・ホラン、ベニー・ファコーネ  
④Phantom Vox

連続して変化している感じですね。

○そのように仕事を続けていくために意識していることは何でしょう？

●ロックのアーティストなどは、そのときのグループ感を相当大事にするので、初めてやるセッションの最初の2日間はすごく緊張しますね。どういうグループでやるんだろう、どういったところに重きを置いているんだろうと、臨機応変にやっていると、こいつ使えないなとなる。そうなると次から仕事は来なくなりますからね。

○そうやって信頼を勝ち取ってきたんですね。

●運が良かったんだと思います。運良く紹介をいただいたり、信頼をしてもらえたのはありがたいことですね。

○アメリカでエンジニアをしていかがですか？

●アメリカではいろんな人がセッションにかかわっていて、国籍は関係ないんです。できるかできないかだけ。だから音楽に純粋に向き合えるんです。すごく勉強させてもらっていますね。

## At Phantom Vox Studios



▶ラックに取められた機材。左のラックには、CWEJMAN、WIARD、ANALOGUE SYSTEMSなどのモジュラー・シンセ類、右のラックには、DAVE SMITH INSTRUMENTS Prophet '08 Module、MOOG Slim Phatty、Moogerfooger MF-102などがセットされ、ラック上にはKORG MS-20 mini、METASONIX D-1000、AVALON DESIGN VT-737SPなどが置かれている。右後ろに見えるラックには、LINE6 Bass Pod、Pod Pro、EMPIRICAL LABS EL8 Distressor、UNIVERSAL AUDIO 1176 LN、TECH21 SansAmp PSA-1.1、DBX160、TELETRONIX LA-2A、EVENTIDE H3000、DELTALAB Effectronなどをセット

◀ドラコ・ロサのプライベート・スタジオ、Phantom Vox Studiosのメイン・コンソールである32chインプットのNEVE 8068。モニターは外側からGENELEC 1031A、YAMAHA NS-10M Studio、AURATONE 5Cをセットしている

